

博士論文要約

看護職者の避難所における支援活動に関する経験

Experiences of Nurses Engaged in Disaster Nursing at Emergency Shelters

小川 紀子

Ogawa, Noriko

I. 序論

日本において、過去10年（2008年から2017年4月現在）に発生した自然災害は90件を超え、毎年被害が生じている（気象庁, 2017a; 2017b; 2017c）。被災者は、予期せぬ災害を体験し、住居を失い、恐怖と不安を抱え、心身ともに辛い状態の中で避難所生活を送る。被災者にとって安全な場であるべき避難所では、震災関連死、深部静脈血栓症や慢性疾患の悪化、感染症の発症など、被災者の健康を阻害する場ともなっている。看護職者は、そのような被災者の生命・健康を守り、自立できるよう、避難所での支援活動を行っていくことが重要である。しかし、災害の規模、発生場所、被害状況、季節といった要因によって生じる問題が多様かつ複雑化し、高度な実践力が求められる避難所で、看護職者がどのような実践を行っているのか、その実践にはどのような特徴があるのか、未だその実態は十分に明らかになっていない。そこで、本研究では、避難所での支援活動に携わったことのある看護職者が、どのような経験をしているのか、とりわけそれらの支援活動経験がどのように積み重ねられ、実践力へとつながっていくのかという点に着目することによって、今後の避難所における看護職者の支援活動やそのための災害看護教育への一助にしたいと考えた。

II. 目的

看護職者の避難所における支援活動に関する経験を明らかにする。特に、どのように災害支援経験が積み重ねられているのかに着目して明らかにする。

III. 方法

研究デザインは、ナラティブ法による質的研究である。研究参加者は、国内外問わず災害支援経験が2回以上、災害支援経験2回目以降に、2015年以前の国内災害において避難所での支援活動に携わった経験を有する災害支援ナース3名、救護班看護職者3名である。非構造化インタビューにより収集したデータをもとに、テーマ分析と構造化分析を併用して分析を行った。研究参加者の募集は、災害支援ナースが登録している都道府県職能団体および救護班を編成している都道府県医療施設に協力依頼した。2017年2月から2018年7月に、1名につき2回または3回のインタビューを実施した。なお、本研究は、日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。

IV. 結果

避難所における支援活動に関する経験の特徴を表すテーマをつけ、研究参加者ごとに記述した。なお、経験の大テーマを『』およびゴシック体、経験のテーマを【】、経験の構造の特徴を《》で示した。

1. 風間氏：『被災者の話を聴くかかわりに対する心構えをこれから支援に行く看護職者に伝え育てることも支援活動という方向性を見出す』

こころのケアを目的として避難所を訪問した風間氏は、支援活動終了後、【被災者の話を聴いただけで何も役に立っていなかったという思いの出現】により、自身の思いと向き合った。被災者の悲しさや怒りといった思いに対する返答が分からない不安の中、被災者から話をしてくれることがありがたかった。しかし、その思い以上に、自分が支援に行ったこと自体が、被災者の負担になっているのではないかという思いが勝り、【話を聴くという自分のかかわりに意味づけができない】でいた。しかし、振り返りを続けた風間氏は、【話を聴くという自分のかかわりと向き合い災害支援に対する自身の方向性を見出す】ようになった。風間氏の経験の特徴は、《被災者の話を聴くかかわりは臨床実践のようにはいかない難しさがあるため、その心構えを他のスタッフに伝え支えていくことも自分の役割である》であった。

2. 櫻井氏：『追体験により話を聴くことの大切さを実感し次の支援活動につなげる』

櫻井氏は、救護班の一員として避難所での巡回診療を行った。そこで、【遺体の身元確認をした松岡氏との出会いとかかわり】があった。櫻井氏は、救護活動を終えても、松岡氏のことが頭から離れず、遺体の確認をする松岡氏の体験をまるで自分のことのように感じ、帰りの車の中で一睡もできず放心状態だった。しかし、日常に戻っても、【松岡氏のことが頭から離れないことによる精神的負担の継続】に限界を感じ、所属病院のスタッフに自分の気持ちを話した。すると、【自分の気持ちが楽になったことでこころのケアの重要性を実感する】という経験をした。その後、その経験は、【身体だけでなくこころもみていくことを意識するようになった支援活動】へとつながっていった。櫻井氏の経験の特徴は、《災害支援活動とその振り返り、災害支援経験、臨床実践経験の積み重ねが、被災経験がなくても被災者と話ができることにつながっている》であった。

3. 二宮氏：『災害支援経験が自身のノウハウとなり糧となっていることに気づく』

九州豪雨災害において、2回にわたって避難所での支援活動に携わった。1回目、2回目ともに【話を聴くというかかわりが災害支援と言えるのか分からない】自分がいた。また、避難所で支援者として活動している被災者の疲弊感を感じ取ったものの、【支援の全体像が見えない中で行う支援活動】であり、支援につなげることができなかった。自分が何かをしたという思いに至らないのは、自身の災害看護に関する知識・技術不足にあると考えた。それでも、【支援活動に行くのは自分が看護師だからかもしれない】と思っていた。こうした中で、振り返りを続けた二宮氏は、チームメンバーと話し合うことや、自分

がすべき支援活動をイメージするといったことができるようになったのは支援経験があったからだという、【災害支援経験が次の支援活動に活かされていることへの気づき】を得た。二宮氏の経験の特徴は、《災害支援経験が自身のノウハウになっている、今までできなかったことができるようになっていくかもしれない》であった。

4. 大野氏：『今後に備え1泊2日での支援の在り方を検討するという課題を見出す』

関東・東北豪雨災害において、避難所での支援活動を行った。避難所にいる保健師から依頼され、健康管理に関する情報収集をしながら被災者の困っていることなどを聞いた。1泊2日の支援活動の中で、【できる限りのことをしたいという思いの中での避難所にいる被災者とのかかわり】をした。しかし、支援活動終了後、被災者が納得するような返答ができなかったことへの心残りや被災者と時を共有することが全然できなかったという思いから、【1泊2日における被災者へのかかわりに対する不完全燃焼感】が生じた。振り返りを続けた大野氏は、【1泊2日における支援活動をどのようにしていけばよいのか考えるという自身の方向性への気づき】を得ていた。大野氏の経験の特徴は、《臨床実践経験から災害支援で分かることや推測できることもあるが、被災者の話を聴くかかわりについては支援活動期間に応じて取り組んでいきたい》であった。

5. 相葉氏：『チームを1つにするために声かけとコミュニケーションを大切にしている』

チームを1つにすることが大事という考えを持っていた相葉氏は、初めて他のメンバーと顔を合わせた時に、【声かけとコミュニケーションを意識したチームメンバーへのかかわり】をした。被災地へ向かう頃には、チーム内では安心と警戒心が解けたような雰囲気になっていた。福島に入ったチームメンバーは食事・風呂付のホテル、タクシー移動という恵まれた支援環境を受け入れられなかった。そこで、チームメンバー全員で、この恵まれた支援環境の中で支援活動をしていてもよいのか話し合った。そして、自分達が置かれた環境の中で精一杯支援活動をするという、【話し合いによってチームの思いが1つになった中での支援活動の展開】へとつながった。支援活動終了後、達成感や満足感が得られた相葉氏は、いいチームだったと実感した。そして、次の災害支援でも、チームメンバーへの声かけとコミュニケーションを大切にしたい。相葉氏にとってこれらの成功体験は、【これからもチームメンバーが1つになるように尽力し続けるという強い思い】になっていた。相葉氏の経験の特徴は、《日頃の臨床実践経験が災害支援でチームを1つにすることに役立ち成功したから今後も続けていく》であった。

6. 松本氏：『初めての支援活動経験から獲得し実感したことから形づくられた支援活動』

東日本大震災において、避難所にいる被災者の血圧測定に回るようになった。無理な介入は被災者の負担になると考えた松本氏は、血圧測定をしつつ救護所にいる医師の情報を伝え、受診するか否かは【被災者に意思決定を委ね介入距離を考えたかかわり】をし

た。一方、薬の自己管理ができない【被災者への支援が必要と判断し直接的に介入するか
かわり】もした。また、【被災者のことを考えた引継ぎという形の支援のつなぎ方の検討
と取り組み】をチーム全員で行った。松本氏には、能登半島地震での災害支援経験から得
られた【自分の考え、価値観、チームの存在が自身の支援活動につながっているという思
い】があった。松本氏の経験の特徴は、《災害支援の基盤となる考えや価値観は対象者が
患者か被災者の違いだけであり、臨床実践にも災害支援にもつながっている》であった。

V. 考察

1. 避難所における支援活動に関する経験の特徴

避難所における支援活動は、数時間、1回限り、1泊2日もしくは3泊4日という限られ
た時間、期間の中で行われるという時間特性、支援の全体像や他職種の支援状況が見えな
いという場の特性の中で行われ、加えて看護職者の想像をはるかに超えた被災者の体験に
向き合う経験であるという特徴があった。避難所における支援活動には、こうした特徴が
絡み合っているため、看護職者は、避難所で生活する被災者の話を聴くこと自体も困難な
場合もあり、被災者のニーズにつながる情報を収集できたとしてもそれらに応えられず、
常に模索しながら支援活動に取り組んでいると考えられた。

2. 避難所における支援活動を支えるチームの存在

避難所における支援活動は、チームでの活動となる。チームメンバー同士が支援活動に
関する価値観や方向性について話し合うことを通して、チームメンバー個々の持つ知識や
技術が統合され、被災者から求められるニーズに対応できる力が高まり、支援活動の質を
高めることにつながると考えられた。そして、こうしたチームの存在は、自分自身のみな
らずチーム全体の達成感や満足感をもたらし、看護職者の支援活動の難しさを乗り越える
力となり得ることが示唆された。

3. 経験が統合され意味づけられながら形になっていく看護職者の支援活動

災害支援に携わる看護職者は、1つ1つの実体験の意味を振り返ることによって、その
意味づけが生まれ、災害支援や避難所支援に対する考えや信念、価値観、病院等臨床実践
で培ってきた知識や技術が統合され、積み重ねられていくものと考えられた。

VI. 結論

臨床実践経験があれば災害支援経験に活かせるばかりではないが、様々な臨床領域での
経験と災害支援経験が統合され、意味づけられることによって、自身の災害支援という実
践が確立されていくのではないかと考える。看護職者が災害支援を経験する機会は少ない。
災害支援を行う能力をつけるためには、日々の臨床実践経験の積み重ねとともに、災害支
援経験を臨床実践経験と照らし合わせ積み重ねることが大切であると考えられる。その手立
てとして、災害支援経験の振り返りが重要となる。